
慶次郎と美嵐丸 ～ 前田慶次郎異聞 外伝

泊瀬光延

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慶次郎と美嵐丸 ～前田慶次郎異聞 外伝

【Nコード】

N1449F

【作者名】

泊瀬光延

【あらすじ】

実在の豪傑、前田慶次郎とその小姓の物語。病床の慶次郎がふとしたことと言った言葉でその小姓は自害した。史書から取材した武家の花、主従の契りの誉れ。「前田慶次郎異聞」の外伝でもありません。この史実をどう消化してよいか迷っていましたが、遂に答えを見つけました。

美嵐丸

「お前は・・・儂が死んでも伴をしてくれぬよな？」

この男らしからぬ弱々しさでそう言われた時、美嵐丸はつと目から涙を流し、白湯をと言いながら一度、床の慶次郎に深々とお辞儀をして部屋を出て行った。

慶次は珍しく病に伏せていた。

戦乱にしか生きられない漢が^{をこし}気苦労を積み重ね、肩が凝る毎が続いた。金沢の最初の冬の厳しい寒さに風邪を^{こじ}拗らせてしまったのだ。強靱すぎる身体の間人は一度調子を狂わすということ、体の捻子が緩んでしまうようだ。

昨年、義父の前田利久と共に叔父の前田利家の差配する加賀は金沢に、真父の滝川一益の麾下より移ってきた。

尾張荒子の前田家の当主の座を織田信長の命で取り上げられ、そこを追い出された。その時、気の狂わんばかりに利家を呪った母も死に、利久の生家である前田家に帰還を許されたのだ。

体の弱い利久の面倒を見ながら数人の小者を差配し、何かと忙しかった。春には利家の家臣の娘と祝言が決まっていた。

帰ったばかりの今は利家の跡目を狙っているのではないかと周りの目は冷やかだ。命を狙っているという輩もいるという。

利家は帰参直後の慶次郎に、一人の若衆を宛った。女気がいない不自由を紛らわすためであろうか。戦場で不死身と言われたこの甥が、傾城の陥穽に陥るか見てみたかったこともある。

その若衆は先の戦で父を失い、それを知った母も自害し後を追っ

た。哀れに思い、また美童好きの利家が側に置いた。名は美嵐丸といい、武家の躰の厳しさから紡ぎ出された男になる前の何とも言えぬ芳香を感じさせる十五の美童であった。若き日にあった蒲生氏郷を彷彿とさせた。

ただ、気が恐ろしく強く、奥方の手前もあり、利家も迂闊に手を付けられなかった。恥と思えばすぐ腹を斬りそうな、それほどの研ぎ澄まされた裸刀と例えられるほどの少年だった。

慶次郎も剛胆、諧謔を好む性格で、当主の前でも飾り立てることなくものを言う男。当主の甥ということも手伝って、家内で少々煙たがられていた。

（似たもの同士じゃ・・・どうなるか面白いかな）

利家はほくそ笑むと、美嵐丸を慶次郎のもとに遣わせた。

殺して差し上げましょう

最初の日にかしづく美嵐丸に慶次郎は言った。

「叔父きに頼まれて俺を殺しに来たのか？」

最初は吃驚した美嵐丸だが、怒りを満面に表して、

「殺して欲しいならそうして差し上げましょう！」

と言つて脇差しを抜き、左片膝を立てて躍り寄り引いた右手を横腹に付けて慶次郎を睨んだ。

慶次郎は一向に動じることもなく美嵐丸を見ている。怒りに染まった赤い頬、紅を引いたような柔らかそうな唇が少し開き、真っ白な八重歯が出ている。

豊かな前髪を額で分け、錦の結わえから長い艶やかな後ろ髪が揺れている。若く幼い体臭がふわと慶次郎を包んだ。

慶次郎はふと破顔すると、

「……すまぬ。冗談だ。これから儂に仕えてくれるのか？」

はつと我に返った美嵐丸は後ろに脇差しを投げ出して平伏した。

いかな理由が有ろうにも主にこのような態度を取るとは許されることではない。美嵐丸は家内でも嫌われ者の慶次郎のもとに行けと言われた時、利家に捨てられたと思った。当主の側にいて戦^{いくさ}で手柄を立てて晴れて家を継ぐという夢が失われたと感じたのだ。今は遠い親戚が後見人になっているが、特に取り立てて功績もなかった父の家など、どうでも良いと考えているようだった。

美嵐丸は一時でも取り乱した自分が恥ずかしくなった。

だが豪放な慶次郎はそれ以上そのことを言わずでなく、何事も無げに言いつけた。

「親父殿に粥を作ってくれぬか。儂もそれを食う」

告げ口

小者に言いつけ粥を作らせたが、美嵐丸は自分も竈に立ち、毒を盛る者がいないか注意を怠らなかつた。

城中である者と暮を打ち、完膚無きほどけちよんけちよんに破り、それを是とせぬ相手から槍の試合を挑まれ、それまた打ちのめしてしまった。あまり身持ちの良くないその男と、彼と同じ類の同僚は慶次郎の命を狙っているという。

美嵐丸は膳を利久の伏せている部屋に運ぶとそこで慶次郎達におさんどんをした。

具合が悪そうに背もたれをしてゆつくりと食事をしている老父に慶次郎は城中であつたことなどを面白可笑しく話している。老人は口を椀につけたまま、ときどき咽せる。聞いているのだろうか。

「今日からこの可愛い者が来てくれました。少しはこの家も華やぐでしょうな！」

食事の終わつた老人を、慶次郎が大きな体で抱いて寝かせると、美嵐丸のほうに向かつて笑つた。この家は女中もおかず家来も仕えていない。

美嵐丸は思わず聞いた。

「慶次郎様・・・何故にお家来衆を置かないのです？今まで一人で大隠居様（利久は家中でこう呼ばれていた）をお世話していたのですか？」

慶次郎は寝入つた老人の額に手を翳して熱を診ていた。ゆつくりと美嵐丸を向いて言つた。

「家来衆なぞ面倒だ。身軽で良い……いつかはここを去るつもりだから」

美嵐丸は仰天した。

「な……なんと仰せです！大隠居様はどうするのです？」

それよりも当主、利家が何と言うか！

「親父の面倒は最後まで看^みる。それからの話じゃ」

「……私が御屋形様に告げ口をしたらどうするのです……退散は上意討ちの的となりましょう！」

慶次郎はにっと笑ってじつと美嵐丸を見た。

美嵐丸ははつとした。

そんなことを軽々しく言うな、という頭があつて思わず言つてしまった。

頭の中に『したいならすれば良い』という慶次郎の声が聞こえた。

だが、実際の慶次郎は何も言っていない。そう言つたら美嵐丸の自尊心が傷つくということを分かっていた。

美嵐丸は慶次郎を口を震わせて見ていたが、次第に目を下に落とし、平伏^{ひれふ}した。

亡者達

美童丸は注意深く慶次郎をあれから観察していた。

そしてどこか慶次郎に惹きつけられていく自分を意識していた。何もかも剛胆、豪快。そして弱い者には限りなく優しい。こんな男が世にいたのか。

だが、噂で長島の一向一揆のとき女子供も殺したということを知った。いかな第六天魔王を自称した織田信長の命と雖も、^{いふと}美嵐丸は慶次郎がそんなことをしたとは思えなかった。

美嵐丸は、その時のことを同じ所に参戦した者を探して聞き回った。

ある者はあやつは鬼神じゃ、^{んぴにん}と言ひ、ある者は情け容赦のない人非人と罵った。

「僕は・・・見た！この目で！敵の幼いおなごの首を地面に槍で突き通すのをな！」

この男は足軽として慶次郎の周りに付き従ったという。美嵐丸は不思議に思った。その頃は慶次郎は滝川一益の軍中にいた。一益こそ実父だ。武将がそんな女子供を相手にするはずはない。

「何故にそのおなごは慶次郎様などの前に出てきたのです？」

「・・・僕は男は殺すが、おなごは殺さねえ！せつかく生かして捕まえたのに・・・」

その男の顔をみて美嵐丸は目を背けた。

ぎらぎらとした目でその時を思い出す年老いた男の顔は、欲望にまみれて生きてきた徴を晒していた。

ある夜、大きな声に美嵐丸は飛び起きた。

主の慶次郎の部屋からのようだ。美嵐丸は大刀をひっ掴んで飛ん

でいった。

障子の外で慶次郎の名を呼んだが返事がない。美嵐丸は飛び入った。

「旦那様！」

床の上には胡座で座り上半身の寝間着を脱いで宙を睨み続ける阿修羅のような男がいた。

「・・・どうされました？」

躍り寄って話しかけたが返事がない。

慶次郎は筋骨逞しい肉体を硬直させ、暗闇の天井を睨み続ける。首から肩、両の太腕の筋肉がりゅうと盛り上がり、腹筋が階段のようになって腹で息をしている。全身から汗がじつとりと出ている。

ふと慶次郎が美嵐丸を見た。今まで気が付かなかった様に。

「お嵐か・・・済まぬ、起こしたな。少し寝ぼけたようだ」

「何を見ておられたのですか？」

美嵐丸は月夜の薄明かりで慶次郎の顔を見ようと顔を近づけた。

慶次郎の男の匂いがむっと鼻を突いた。

「僕は・・・今までたくさんのを殺めてきた」

美嵐丸は自分が陰で聞き回っていたことを知られたかと思いびくつとした。

「時々・・・いや、いつも思い出す。連中の間際の顔をな・・・」

「恐ろしいのですか・・・？」

「うるさいのじゃ」

「え？」

美嵐丸は意外な答えに目を丸くする。慶次郎は寝間着を肩に戻しながら言った。

「僕は・・・奴らの分まで生きると言いに来る」

「生きると・・・？」

「僕はもうこの世に飽いた。だからいくさで死のうと思う。強い奴に当たるとぞくぞくする。ここで存分に戦って死ぬことが出来るだろうと。しかし気が付くといつも生き残っている。五体満足でな」

「その亡者達が旦那様を守っている・・・？」

慶次郎はかかと笑った。

「かも知れぬ。それが奴らの復讐なのだろう」

「先ほどは何を怒鳴ったのです？」

「もう、死なせると言っただけだ」

美嵐丸は慶次郎の胸に抱きついた。

「お嵐・・・」

「死なないで下さい！私を旦那様のお側に居させて下さい。そして一生・・・」

慶次郎は美嵐丸を愛おしそうに抱いた。そして強くその広い胸に閉じ込めた。その美しく梳かれた髪の毛の匂いを嗅いで。

摩利支天の御前で

風邪をこじらせ、慶次郎の肉体は日に弱っていった。

この時ばかりは利家も女達を利久の世話に寄越し、医者も呼んでくれた。だが、慶次郎の下痢は治まらず、何も食べられない状態が何日も続いた。

夕暮れが近づいた時、慶次郎は目を覚ました。妙に気分が良い。天井を見るも、亡者の顔は誰も見えない。

（・・・亡者達にも見放されたか。そろそろ終わりか。約束を破った儂をあいっ等は地獄で待っているじやろう。もう一合戦出来んかったはちと口惜しい・・・）

目を横に移すと、涙を流した美嵐丸の目が慶次郎をじっと見ていた。

（お嵐・・・済まぬな。楽しかったぞ）

だが真剣に心配する美嵐丸を少しからかいたくなかった。儂は死ぬ。だが何も恐くはなかった。その豪放さが却って、この日本史上屈指の大豪傑を悔やませる事態を生んだ。

「お前は儂が死んでも伴をして呉れぬよな」

その時慶次郎は咽せた。痰が絡み次の言葉が失われた。

「今、白湯を・・・」

美嵐丸は慶次郎を落ち着かせると火鉢に炭を足し、しばし退散する旨を言って深く頭を垂れた。美嵐丸が去った後、火鉢の炭がぱちと言い鉄瓶がしゅうと音をさせ、彼が平伏した畳の一所は一滴の清

い水で濡れていた。

慶次郎は真夜中に頭を打たれたように感じ目を醒ました。
ぴんと張りつめた冬の外気が雨戸の隙間から侵入していた。

「お嵐！」

慶次郎は弱った体を満身の力で起こした。

「誰か！」

囁れ声で呼んだが、女中も小者も寝入ったか、誰も起きてこない。
慶次郎は必死の気力で立った。そしてよろめきながら障子を開け、
柱を手繰るように美嵐丸の部屋に向かった。

「お嵐！」

美嵐丸の部屋に入って慶次郎が見たものは、部屋の上座に飾った
摩利支天の掛け軸の前に蠟燭と線香を炊き、数珠を手首に巻いて脇
差しで胸を突いた美嵐丸の骸であった。

その顔は従容とし、何の翳りも無く、主のために命を捧げた者の
顔であった。

慶次郎は不覚を嘆いた。そしてその書台の上にあった書き置きを
見た。

前田慶次様

私もお手に掛かりし亡者どもと

おんみちをおたすけ申し候

決死の場合あれば

私の姿をお探しくだされ

嵐

旦那様

参る

鬼神参上

その三年後、養父の利久が没した。

前田慶次郎利益は妻を娶り子を為すも、天正十九年冬に前田家を出奔した。

その直前に何食わぬ顔で利家を家に招き、騙して水風呂を浴びせ、全てを捨てて逐電した。

妻子は舅である前田家の重臣の家に引き取られ、何不自由なく暮らした。

慶次郎の武勇は天下に比類無く、その後、上杉謙信の家を継いだ景勝に仕え、その侍大将の直江兼続を支えた。

慶長五年、関ヶ原の戦いに時を同じくして出羽（山形）に起こった上杉と最上義光の戦いにおいて、徳川方の勝利の報に、上杉軍は長谷堂城の攻撃を中止し撤退を余儀なくされた。

上杉軍の大将、直江兼続は殿を務め、鉄砲隊を駆使し奮戦するも、次第に最上の追撃に押され、疲れ切っていた。

今はここまで、と切腹をしようとする兼続に慶次郎は、
「心せわしき人よ。今しばし待たれよ」

とて、それぞれに朱槍を携えた七騎を集め、慶次郎の家来二人を合わせ、ただ十騎にて数千の押し寄せる敵のただ中に斬り込もうとしていた。

武人の誉れの死に場所とて、斬り込む前に雄叫びを上げる武将の中で、慶次郎とその郎等は静かに山中の陣から敵を見つめる。

眼下の朝もやの中に踊る亡者の中に、真摯の目で見やる前髪、長黒髪的美童あり。そして微笑んだ。

「お嵐！そこにいたか！見ておれ！」

「旦那様！」

郎党の一人が心配して声を掛けた。

これも緋の革鎧に身を包んだ、美嵐丸にひけを取らぬ若武者。隣の仁王のような武士が鎌槍をくると回して脇に挟んで言った。

「前田様。美嵐丸様がいらっしやいましたか」

慶次郎の代わりに松風がいなく。

「まだ死なせてくれませぬな！」

真夏の熱気よりも熱い風が、慶次郎の体から舞い上がった。既に齡五十を越えているが、その筋骨と精神は全く衰えていない。

慶次郎は後ろを振り返らず叫んだ。

「小吉！りん！参る！」

恐れを知らぬ十騎は脱兎の如く敵陣に向かって丘を駆け下りた。勝機に寄った最上勢は、鬼神達が駆け寄りて来るとはまだ知らない。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449f/>

慶次郎と美嵐丸 ～前田慶次郎異聞 外伝

2010年10月10日10時19分発行